

2010年6月3日

東日本区1998~2011ヒストリアン 吉田 明弘

ニュースター誕生の予感

横浜国際大会まで63日

横浜国際大会の開会式まであと63日。胸の高鳴りを覚えます。今回の大会も新しいスターが誕生するに違いありません。あるいはすでに誕生しつつある、と表現しても良いでしょう。

22年前、京都で行われた第58回国際大会で今秋に国際事務所に就任が予定されている西村隆夫さん(東京センテニアル)が、鮮烈デビューをしました。

当時、34歳。チーフマーシャルを務め、抜群の英語力とウイットに富んだ進行で参加者の心をとらえました。彼自身も、そこでワイズの中における自分の居場所が確認できたと言っています。以後の活躍は、ご承知のとおりです。

今回の大会のホストを受けるにあたっては、より若い人、新しい人に存分に腕をふるってもらおうという狙いがありました。準備段階では比較的時間に余裕があるベテランが取り仕切る場面もありましたが、いよいよ本番。若手、新手的活躍の舞台です。もちろん、「なんのまだまだ世代」も張り切って総力戦となるでしょう。

今回のチーフマーシャルは、入会4年目の笈川光郎さん(東京)、サブマーシャルが岡野泰和さん(大阪土佐堀)、宮村智子さん(横浜つづき)です。

東京YMCA130周年記念式典

東京YMCA創立130周年を祝う感謝礼拝と記念式典が、5月29日午後、日本キリスト教団銀座教会で行われました。

感謝礼拝では、かつては東京YMCAの主事、現在は常議員である関西学院大教授・山本俊正牧師が説教をされました。その中で先生は、「今、世の中は他者からの呼びかけに溢れている。呼

びかけと応答が人間関係のベースである。人には応答責任がある。YMCAはイエスの呼びかけに応える運動である。その時代に認められない人、非常識を受け止めて、応えることが必要である。130年の歴史年表にあるひとつひとつのプログラム名は、呼びかけに応えた記録である。神の声を聴き、応えることを、新しい歩みの第一歩としたい」と語られました。

事業負担金の納付に異変？

2009-2010年度から、BF、ASF、TOFを区(一部は区を通して国際へ)に納付する期限が、早くなりました。

これは、国際会計の報告・承認を、その年度内に行うようにするために2009年のスリランカの国際議会で決まったものです。事業年度は、従来どおりの7月~6月ですが、会計年度が4月~3月となりました。

今年度のクラブからの納付は、3月末で締め切られ、集計結果は、区大会で発表されました。

近年、この事業負担金について、各クラブ、各メンバーの取り組みにやや変化があるように感じています。

これまででは、目標に対して努力して、結果として達成したり、しなかつたりということでしたが、最近は納付そのものに否定的な考え方が出てきていることです。自分たちは違うことに費用を出したいという主張です。

事業負担金の経緯と問題点

最初はBFから始まった

個々のYMCAへの奉仕からスタートしたワイズメンズクラブでは、1930年代に設けられたBF(当時はビショップファンド)が国際レベルでの最初の基金です。当時は米国で開かれていた国際大会へ海外ワイズメンを招待する目的で

した。資金集めには、現金とともに使用済み切手を集めて換金する方法もとられました。

次に設けられた基金は、1955年に始まったASF(当時はPWASF)でした。YMCA主事を目指す学生を支援する奨学金制度です。

日本区は、戦後、この2つの事業に積極的に取り組みました。

当時、BF代表として出国することも、迎えることも素晴らしい出来事でした。

1960年代中ごろまで、日本区は、国際会費を全額納付することが出来ませんでした。しかし使用済み切手を集めることは誰でも可能でしたから、こぞってこの切手集めプログラムに参加したのです。国際協会も使用済み切手収集を奨励して、現金による拠金よりも有利なポイントを設定していました。日本区は、自ら国際が定めるよりも高い目標を掲げました。

ASF事業も盛んでした。毎年、事業主任は全国のクラブに檄をとばして、将来、YMCAで働くことを希望する学生を募り、受給学生の決定も全国に伝えられ、ワイズメンは朗報に喜びました。学生を区大会に招き、激励しました。約30人の奨学金を受けた主事が全国にいた時代がありました。そして、「おかげでアルバイトをあまりしないですんだ」などと、話してくれましたから、ASFが大変身近に感じられました。

人類の抱える危機に目を向けて

1970年、国際協会が初めて国際的問題に目を向けて開始した事業資金が、「Human Crisis(人類の危機)」でした。世界の人々が気づき出していた人類が抱えている諸問題を課題とすることになりました。それは1972年に「Community Service」(日本区だけ)、1973年から「Time of Fast」と名称を変えて今日に至っています。

現在のCS資金は、日本が始めた日本独自のものです。お年玉切手シートを集めて、換金するものです。1973年から始まりました。これも、当選した切手シートはどの家庭でも数枚はあり、死蔵する可能性のあるものでした。額面あるいはプレミアム付きで換金できましたから、非常

に効率よく資金を得ることができました。

2000年からは、東日本区では、『ファミリーファスト』が加わりました。

自由献金としては、1958年から、エンダウメントファンド(国際)、1982年から日本ワイズ基金(日本区:現在の東・西日本区ワイズ基金)が始まっています。

日本における問題点

本来捨て去られるもの(使用済み切手)あるいは死蔵されるもの(お年玉記念シート)を活かすこととセットとなった資金集めでしたが、組織内の資金需要の高まり、切手などの収集・換金事情の悪化によって、どうしても現金で集める方が優先されるようになってきました。そのため、現金を財布から出すだけではない、収集方法のアイデアを競い合う楽しさが失われた感があります。(来年度は横浜国際大会の資金集めのひとつとして国際・交流事業委員会において各家庭に眠っているテレホンカード集めが行われます。これはアイデアですね。)

また、メンバーにとって、基金や資金の用途が以前のように生き生きと身近に感じられなくなってきていることも事実でしょう。

世界的な災害に対する緊急支援などの要請も頻発します。

UGP(国際統一プロジェクト)のHIV/AIDSやロールバック・マラリアなど、焦点を絞ったアピール性の高いキャンペーンも出てきました。従来からの事業資金が注目されにくくなってきています。

問題の解決の模索

手をこまねいてきたわけではありません。さまざまな試みがなされています。国際ではTOFを分かりやすくする改称、例えば「TOF/World Service Fund」とする案などが検討されています(Y's Men's World 2009年10月号)また、東日本区ではBFの目標額を減額したり、ASFとCSを統合した規定を制定したりしました。

今年度は、地域奉仕事業委員会で、ASFの意義がメンバーに浸透していないとの問題提起が

なされ、「目に見える ASF」を目指して、自発的に献金する雰囲気づくりが模索されています。

Historian's View

現在の事業負担金について、個人的に3つのポイントがあるように思います。

一つは、基金の種類が増えてきていることです。風呂の湯温が少しずつ上がると同じで、ずっとそこにいる人は気が付きませんが、新しく入る人にとっては、高いハードルになるわけです。入会時にそのことに抵抗を感じたメンバーが、クラブに染まり、そのことに最も鈍感になった時に、区やクラブの役員に就くという皮肉な一面があります。

数年に一度は組織の各段階で、全体を俯瞰して、項目を減らしたり、目標額を変更したり、基金そのものを抜本的に見直すことも必要だと思います。

二つ目は、既存の基金がかつての輝きを失っていることです。それぞれの基金の集め方や使い道の現場には、もっと生き生きとしたドラマがある筈です。このナマの情報を要求して伝えることが必要です。クラブでも、プリテンにロースターの用語解説を引用したアピールを掲載していますが、用語集は、あくまでも字句の説明であって、行動への揺さぶりにはなりません。

三つ目、これが何よりも大事なことだと思いますが、クラブやメンバーの意識です。

誰しも、1人だけでは出来ないことをやりたくてクラブに入ったのだと思います。1クラブでは出来ないことをやるために国際協会に加盟しているのだと思います。1人や1クラブでは小さな働きも、全世界で心を合わせてやると、思いがけない成果になり、そのことに驚くとともに、クラブに属している喜びを感じるというのが、多くの方の実感です。

基金を集めること、使うことには、それぞれ苦労があり、喜びがあり、関心があり、話題があるはずですが、もし、この話題に加われないなら、クラブとしてもメンバーとしてもさびしいことです。

区大会の表彰の半分は事業負担金関係です（その良し悪しは別問題として）、表彰される意味が共感できずに拍手することもむなしいことだと思います。

ワイズにおける事業負担金集めは、ヤキトリでいえば串です。それが組織を繋ぎ合わせているのです。私たちは、サイコロステーキではないのです。この串がなければ、わたくしたちがクラブに属している、クラブが国際協会に属しているという本来の意味を失います。

金額だけが重視されて、「こころ」がなくなかったのかもしれませんが、慣れっこできた面も否定できません。今、大事なことに気付かせてくれているのだと思います。

あとがき

事業負担金については、経過や事業内容には触れませんでした。思わぬ長文になってしまいました。

国際や区の事業負担金を、「duty だから」と説明されることがあります。となると「duty ってなに？」ということになります。

英和辞典を引くと、義務、義理、本分とあります。広辞苑によると、義務も義理も、文字が示すように本来は良い意味なのですが、私たちの生活の中では、あまり良いイメージではありません。ですから、本分といった方が、しっくりするような気がします。

広辞苑では、義務について、「人が自分の好悪にかかわらず当然なすべきこと」としています。さらに「この概念は他方では必ずしも人がそれに従わない傾向があることも前提としている」とありました。ちょっと気持ちや和みました。

東京江東クラブのプリテン5月号に、メンバーの岡田暢雄さんが「新しいメンバーを増やすためにも、もっと基金の用途の説明を」と書かれていました。同感です。

ワイズメンズクラブは、お金を集めているのではなく、人を集めているのですから。